る感じを訴え，頭部CT上右脈絡膜の肥厚認め，右脈絡膜転移と診断された。同月からシスプラチン＋塩酸イリノテカン1クール追加したが右脈絡膜転移巣の拡大あったため，5月21日から放射線治療を開始したところ，頭部CT上では右脈絡膜腫瘤の縮小ははっきりしないが，視機能の改善を認めた。

【まとめ】一般的に肺癌の眼転移は0.7%－12%とされる。男性では肺癌が原発巣として多い。原発巣より先に発見されることもある。放射線治療にて改善を認めた興味深い一症例と考えられたので，若干の文献的考察を加えて報告する。

11. スモン病に対しステロイドを投与され，皮膚結核を含む粟粒結核を発病した1例

浜岡朋子，和田文子，日暮浩実
板倉明司，八木毅典，佐々木結花
山岸文雄　（国療千葉東）

症例は80歳の女性。近医にて昭和43年よりスモン病の診断で，ステロイド剤を継続投与されていた。平成12年11月頃より左側胸部，左肘部に皮下結節が出現，数カ月の経過ののち潰瘍化した。千葉大学皮膚科を紹介され，潰瘍部の膿培養より抗酸菌ガフキー1号，結核菌PCR陽性のため皮膚結核と診断。その後喀痰からも抗酸菌を認めたため当科紹介入院となる。レントゲン，CT上全肺び漫性に散布する粒状影を認め，粟粒結核と診断された。入院後，抗結核薬の投与により皮膚潰瘍は消退あるいは縮小傾向となった。粟粒結核の発症には長期間のステロイド投与が関与していると考えられた。

12. 剖検にて全身性反応性アミロイドーシスが死因と考えられた肺非定型抗酸菌症の1例

篠塚成順，笠松紀雄，橋爪一光
瀬戸武志，高木啓輔
（浜松医療センター）
半澤　儁，籾木　茂，佐々木一義
（同・胸部外科）
小沢享史，安見和彦（同・病理）

61歳女性。平成4年9月より肺非定型抗酸菌症（M. intracellulare）に対し抗菌剤多剤併用にて加療するも肝機能障害，薬疹出現のため治療難航。肺の荒蕪化が進行。

細菌性肺炎の合併により入退院を繰り返した。平成12年1月より下肢に浮腫の出現を認め諸検査の結果，ネフローゼ症候群と診断。同年4月，入院加療行うも急性循環不全のため死亡。剖検にて2次性アミロイドーシスの所見を得た。肺非定型性抗酸菌症にアミロイドーシスを合併した1例を経験したため若干の文献的考察を加え報告する。

13. マクロライド療法が無効であった副鼻腔気管支症候群（SBS）の3例

河野千代子，山田嘉仁，山口哲生
（JR東京総合）

び漫性汎細気管支炎（DPB）・SBSにはマクロライド系抗生物質の少量長期投与が有効であり，近年両疾患のQOLおよび予後は著明に改善されている。一方，本療法が無効で治療に苦慮する症例が存在することも報告されている。今回，当院において経験したマクロライド療法が無効であったSBSの3例を報告する。17歳，18歳，20歳発症と推定され，全例女性。3例ともDPBに典型的とされるび漫性小葉中心性粒状陰影の他，発見時より気管支拡張性病変を認めた。また寒冷凝集素が全例8倍以下であった。マクロライド療法無効例には，共通した臨床的特徴をもっていると考えられ，文献的考察を含めて報告する。

14. Wegener肉芽腫に心外膜炎を合併した1例

鈴木恵理，斎藤嘉一郎（上都賀総合）

症例は70歳男性。平成2年に胸痛と発熱を主訴に発症し，平成3年に肺生検，鼻粘膜生検では典型的な所見を得られなかったが，鼻・眼・耳症状，胸痛，肺結節影，腎障害等の臨床症状とC-ANCA陽性所見よりWegener肉芽腫と診断された。その後，PSLとCPAにて寛解状態維持されたが，上下気道感染のため頻回に入退院を繰り返していた。平成10年にWegener肉芽腫の再燃がみられたためPSLの再増量を行い，さらに貧血の進行と易感染性のためCPAを中止している。平成13年3月発熱と呼吸困難で入院。心嚢水貯留が判明し，pigtail catheterで持続ドレナージを施行。IPM/CS・ABKとFurosemideを併用して心嚢水貯留は軽快した。現在もPSL10mgで現疾患，心外膜炎とも再燃の傾向を認めない。

15. 乳び胸を合併したリンパ脈管筋腫症の1例

山川みどり，山本　司，国友史雄
（千葉労災）
由佐俊和，安川朋久（同・呼吸器外科）
河端美則（埼玉県立循環器病センター）

52歳女性。検診にて左胸水貯留を指摘。胸水穿刺にて乳び胸水を確認した。画像上左胸水貯留の他，両側全肺野に及ぶ気腫状変化を認め，リンパ管造影では腹腔内リンパ管でのリピオドールの停滞が認められた。診断確定のため左開胸下に肺生検を行い，リンパ脈管筋腫症の診断となった。同時に乳び胸治療目的のため